

連載③
内海善雄の
(ITU前事務総局長)
やぶ呪みの
「ネット社会」論

やっとな普通の国並みになった領土意識

民族で構成されているスイスでは、「スイス人とはどんな人か」と聞かれてもなかなか答えにくいものである。フランスでも同じだ。アルジェリアやセネガルなど外国出身のフランス人が多数いて、「フランス人」としての同一性が薄い。しかし、それだけが理由で彼らが、「○○人は」と言わずに「○○国は」と言うのではない。

領土をめぐる問題に、いろいろな識者がさまざまな発言をしている。その中には、国際機関のトップとして国際社会の一隅に身を置いた筆者には、まだ違和感を感じざるをえないものもあるが、領土に関する意識も、ほぼ普通の国並みになったように思う。

国家意識の希薄な日本人

日本人は「我々日本人は」と言うことはあっても、「日本国は」とはあまり発言しない。そして、外国人の前でも平気で日本に関する悪口を言う。

外国人たち、例えばスイス人やフランス人が「我々スイス人は」と発言するのを聞いたことがない。むしろ、「スイス国は」とか「フランス国は」という。もつとも、ドイツ語系、フランス語系、イタリア語系などの多

人たちの物語である。いうまでもなく昭和の前半は、「大日本帝国」という言葉を聞かない時はなかった時代でもある。我々はかつてはこんな普通の国民だったが、このところ、理由はともあれ国家をあまり意識しない、世界でも稀有な存在となっていた。その日本国民が、にわかに国家を意識せざるをえない状況に陥ったのである。

支配する地域が領土

中華思想には、そもそも固有の領土という概念がなかった。支配した地域に王を任命して朝貢を行わせる冊封体制であり、支配した地域が中華世界であって、そこには国境のような限界線の意識がない。このような思想・歴史を持つ中国は、尖閣列島を彼の国の領土とし、やがては沖縄をも領土と主張するにちがいないと識者は警告する。

しかし、日本人にとっても領土という観念は同じようなものではなかったのか。かつて蝦夷地と呼ばれた地域は大和であるとは意識されていなかった。平安時代の蝦夷地は東北地方のほぼ全域が含まれていたが、江戸時代の蝦夷地は北海道であり、明治には消失して

領土は勝つ者だけが守れる

国際社会に身を置く、国家間の紛争や意見の相違は日常茶飯事である。しかし、その解決のために武力の行使を考えるような国はない。当事国は当然、なんとか友好裏に問題の解決を図ろうとする。その妥協点を見つけてお手伝いをするのが国際機関事務局長の重要な任務である。

しかし、領土問題は他の紛争事とは根本的に異なる。国家の根幹問題であり、当事国にとっては勝利のみの選択肢しかない。領土問題に絡む案件がマルチの場に出てくると、当事国同士の激しい非難の応酬や宣伝合戦が始まり、他の業務は停止してしまう。非当事国や事務局長は困った迷惑な問題が出たと嘆き、なんとか問題を棚上げにする方法を模索する。当事国も容易に解決できる問題ではないことを百も承知であるから、棚上げ案が提示されるのを待っているのが実情である。すなわち、一時休戦が解決策なのである。



支配し、領土と主張を続けること

ウグイスが大きな声を上げ、縄張りを誇示し続けない限りは縄張りが奪われるように、領土は常に支配をし、自国のものだと主張していなければ奪われてもしかたない。これは、世界政府が存在しない現在の国際社会の厳然たる現実なのである。人類が国家を基礎として生存している以上は、国土は決死の覚悟で守って



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省(現総務省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(ITU)事務総局長就任。現在は財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。早稲田大学客員教授。